

激戦、熱戦に会場は大興奮！

原沢久喜が3年ぶりの玉座に

～平成30年全日本柔道選手権大会

昭和23年(1948年)、講道館において第1回大会が開催された全日本柔道選手権大会。70年の時を経ても体重無差別で争われる、男子日本一を決する戦いとして、多くの柔道家が憧れている。この大会が今年も4月29日、日本武道館で開催された。選手たちの一戦にかける強い気持ちが感じられる戦いが多く、その度に、客席からはどよめき、歓声、拍手が巻き起こった。

もっとも軽い60kg級から、リオデジャネイロ五輪銅メダリストで昨年のブタペスト世界選手権チャンピオンの高藤直寿(パーク24)が参戦。緒戦で石内裕貴(旭化成)に抑え込まれて敗れたものの、身長で約20センチ、体重は40kgも大きい相手に果敢に立ち向かう姿に、客席からは大きな拍手が送られた。またブタペスト世界選手権73kg級覇者の橋本壮市(パーク24)も挑戦したが、垣田恭兵(旭化成)に反則負けに終わった。最年少はインターハイチャンピオン中野寛太(天理高校3年)、村尾三四郎(桐蔭学園高校3年)という高校生二人。中野は初戦で姿を消したが、村尾は社会人選手を破る大健闘。2回戦では昨年の全日本ジュニア覇者の山口貴也(日本大学1年)に一瞬の隙を突かれ一本負けとなった。一方、勝った山口は初出場ながらベスト8に食い込んだ。

決勝で相まみえたのは原沢久喜(日本中央競馬会)と王子谷剛志(旭化成)の両優勝候補。原沢は準決勝で過去に優勝経験のある加藤博剛(千葉県警)をゴールデンスコア(GS)の末に内股による一本で退けた。王子谷は、史上初の親子優勝を目指した小川雄勢(明治大4年)を、試合序盤に出足払いで奪った「技あり」で押し切って決勝へ進出した。

史上5人目の3連覇を狙う王子谷、それを阻止して3年ぶりの王座奪還を目指す原沢。意地と意地、気力と気力の勝負はゴールデンスコアに持ち込まれた。ともにすべてを出し切って、「最後は記憶がなかった」という原沢が気迫で最後まで攻め続け、王子谷に3つ目の「指導」。原沢が涙の栄冠をつかみとった。

優勝：原沢久喜

「調子が悪くて、苦しんで、苦しんでここまで（決勝）戦ってきましたので、思わず涙が出てしまいました。最後は気持ちの勝負だと思い、気持ちだけで戦いました。今回は日本中央競馬会の選手として出場する最後の戦いでしたので、優勝という結果で恩返しをしたいと思っていました。今日の戦いで出た課題をしっかり修正し、東京オリンピックに向けて突っ走っていきたいと思います」